

村瀬卯一先生との出会いの幸せ

1981年、ある人から（記憶がない）村瀬卯一さんから、呼びかけがあると聞いて事務所を訪ねた。村瀬卯一という名前は、何となく聞いたことがある程度ではあったが、有名な大建築家であることも、最近話題のコンペで、名古屋港の入口に建つビルの設計者に選ばれていたことも、全く知らずに先生のアトリエに出かけた。もし事前に、村瀬卯一という人物について、多少でも知識があったら、未知への遭遇の如き不安と畏れがそこに出かけるべきかどうかの判断を迷わせたかもしれない。そして「名古屋ポートビル」の設備設計者として、設計チームの一員に加えていただいて、基本設計から実施設計の流れの中で、コンペ審査員や、発注者の名古屋港管理組合との会議にも同席して、高揚した気分で、業務に励んだ。シドニーオペラハウスに匹敵する存在で、陸から眺めても、海から眺めても、それぞれの魅力を放ち、外国の人にも、日本人にも愛され、名古屋の玄関として認知される建物となることを願って設備設計に最大の力を投じた。最初、やや膝を硬くして村瀬先生の高説を拝聴していた頃から、次第に親しく接していただけるやさしさを、共に趣味の音楽を語り合うことで味わうことができるようになった。村瀬先生の建築家として、音楽という儀式を挙げる建物の外装、内装に対する熱い情熱は、一日中語り続けてやむことない程であった。

それは、村瀬先生の作品として、1990年、豊明市文化会館として実現したが、PESも参加できたことは喜びである。ある日の会話で、そのころ先生が知った、グレングールドの話になった。1968年の私のアメリカ時代に、テレビのチャンネル13で、毎週グレングールドが出演して説明しながら生演奏をしていたことを、話すと、先生は羨ましそうに。「得したね、そんな前から、聞いていたなんて」という反応だった。あの澄んだ音とリズム感が先生の感覚の一つと知って、グレングールド狂には、本当に嬉しかった。

PESの50年の歴史の中で、著名な建築家と一緒に仕事できたのは、唯一村瀬卯一先生だけである。



豊明市文化会館